

## 登場人物

高井戸 篤志(たかいど あつし)

本編主人公。体が小さく、学校  
でいじめられがち。

高井戸 瑠美(たかいど るみ)

篤志の母親。とびきりの美人。  
綺麗な黒髪。大きなおっぱい。  
篤志にとっても優しい。

勇(いさむ)

篤志と同じクラスのいじめっ  
子。坊主頭。やんちゃでがさつ。  
なにかと篤志をいじめてくる  
…。

僕には、大嫌いな奴がいる。そいつの名前は勇。同じクラスのいじめっ子だ。体の小さい僕を、なにかといじめてくる。勇自身はそんなに大きいわけでもケンカが強いわけでもないのに、格下の僕をいじめることで優越感に浸っているのだ。

「やめてよ、勇くん！痛い！痛いよ！」

放課後。僕はすぐに帰ろうと思ったのだけれど、ほんのちよつともたもたしている内に勇に捕まってしまった。教室の後ろの空いたスペースで、彼はいつものように僕を四つん這いにさせ、背中に馬乗りになった。そして上から乱暴に髪の毛を引っ張る。

「はははは！どうだ、どうだ！痛いだろ、苦しんだろ、篤志！もつとしてやる！そらっ！そらそらっ！」

「ああっ！痛い！痛いってば！やめてよ、もうやめて、勇くん！」

「にひひ！やだねえ〜！えいっ！えいっ！」

嗜虐的に笑いながら、髪の毛への執拗な攻撃を続ける勇。自分が坊主頭だから、僕の髪の毛が憎いのだろうか？

「それっ！それっ！こうだ！こうだ！」

「はあっ！痛い！痛いよ！」

「あははははっ！」

「いいぞ！もっとやれ勇！」

「そうだ、そうだ！篤志なんでもっといじめてやれ！」

「くっ…」

飛び交う心ない声に、僕は泣きそうになる。僕達の周囲を、勇の仲間がいじめっ子グループの連中が取り囲み、口々に囓りたてていた。まるで勇の武勇を、賞賛するみたいに。

他のクラスメイトは見て見ぬふりで肅々と帰っていく。先生は友達同士でじゃれ合っているとしたか思っていないので、既に教室にいない。僕もいじめられているなんてことは、恥ずかしくて自分から先生には言えない。

だから僕はたった一人で、この地獄の時間をやり過ごさなきゃいけなかった。

「くっ…うう…痛い…痛いよお…」

(…助けて…助けて……お母さん…)

「なはは！…うりゃ！」

「ふんぎゅう！うんにゅう！」

僕の口から、とても間抜けな声がでる。髪から手を離れた勇が、僕の口の中に両側からいきなり指を突っ込み、強い力で外に向けて引っ張るようになしてみせたのだ。口が裂けそうな鋭い痛みが走る。さらに勇は、それを続けたまま両方の人差し指を僕の鼻の穴に豪快に突き刺し

てきた。

「ふごっ！」

僕の顔面は、見るも無惨に醜く変形する…。

「おら、謝れ！俺に！この俺に！勇様に謝るんだよ、篤志！」

「ぐっ…くっ…ぎよ…ぎよめん…ぎよめんにやざい…ぎよめんなじやい…い…いしやみゆぎゆん…うう…」

何故謝らなければいけないのか全くわからなかったけれど、僕は仕方なく言う通りにした。だけど、口の中に手を突っ込まれたままなので、言葉はまともに発音されず、なんともみっともない感じになってしまう。

それをまた、周りのいじめっ子達に笑われる。

「ぎやははは！おもしろええ！なんて言ってるだよ！」

「っていうか、こいつなんで謝ってるわけ？一

方的にいじめられてなにを謝ってんの、このチビ(笑)?」

「ははは！いやいや、こいつはチビのくせに普段から生意気だから、謝って当然なんだよ！な？そうだよな、勇？」

「ああ、その通りだよ！こいつの腐った性根は俺が叩き直してやらなきゃいけないだよ！だからちよつと謝ったぐらいでは許さないぞ！…それっ！」

「はあっ！」

僕の口から、一転して切り裂くような悲鳴が走る。口から手を離し、馬乗り姿勢のまま後ろに体を捻った勇は、強引に僕のズボンとパンツをズリ下げてしまったのだ。

そして丸出しになったお尻に、強かな平手打ちを食らわす。

「お前みたいなのは！お尻ペンペンの刑だ

っ！それ！それそれそれっ！」

パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！

放課後の教室に、乾いた音がこだまする。勇は本当に遠慮することなく、馬乗りにした僕のお尻をバシバシ叩いた。丁度騎手が、競走馬に鞭を入れるような感じで。

「あはははははっ！」

「おもしろい！バリおもしろい！」

「勇、最高！もつと、もつとやってみせてくれよ(笑)！」

それを見て、周りのいじめっ子達の笑い声も加熱する。

「くっ…うう…」

あまりの悔しさに、僕は唇を強く噛む。知らず、涙が滲んでいた。どうしてこんな惨めな思いをしなくちゃいけないんだ…。

そして。

「うう…うう…うわああああ！」

「あ、ま、待て！こいつ！」

勇が一瞬力を緩めた隙を突き、僕は奇声と共に彼の股下から這いだしていた。そして近くに放置してあった鞆を掴み、一目散でその場から走り去る。

「待てよ、篤志！くそ…お前！明日覚えてろよ！」

全力で駆ける僕の背中に、勇の怒声が飛ぶ。彼が言う通り、こうして一時的に難を逃れたところ、また明日はなにをされるかわからない。僕はこの地獄から、抜け出すことが出来ないのだ…。

※※※



「…ただいまあ〜」

玄関から聞こえた透き通るような綺麗な声に、僕は慌てて部屋を飛びだした。すぐさまその人の元へと向かう。学校から帰ってから、ずっと部屋に閉じこもって一人で泣いていたけれど、そんな暗い気分も一瞬で吹き飛んでいた。

「おかえりなさい！お母さん！」

「あ、ただいま。あつくん♥」

玄関で靴を脱いでいたお母さんは、僕にとびきりの笑顔を向けてくれた。その途端、僕の心に幸せの嵐が吹き荒れる。

僕のお母さんは、四十歳とは思えないほど若く綺麗で、本当に世界一の美人なんじゃないかと思うくらいだ。顔かたちだけでなく、振る舞いや佇まいの一つ一つにもいいようのない品

があり、肩の辺りまで伸びたサラサラの黒髪は、息を飲むほどの優美さだった。そしてなんと、いつでも、息子の僕に最高に優しい。

僕が世界一嫌いなのが勇だとしたら、世界一好きなのは間違いなくお母さんだ。学校では辛い思いばかりだけど、お母さんと一緒にいるだけで、嫌なことも忘れられる。

「お母さん、今日もお仕事お疲れ様！」

そう言いながら、僕はお母さんの手からやや強引に鞆を取った。そしてそれをそのままリビングまで運んでいく。お父さんが亡くなってから、お母さんはずっと一人で働いて、女手一つで僕を育ててくれた。いくら感謝してもしきれない。

「あら、ありがとう、あっくん♥…あっくんは優しいのね」

僕に続いて歩きながら、お母さんはそう言っ

てくれる。

「ううん、こんなの当たり前だよ！さあさあ、ソファァーに座ってお母さん。僕が今、飲み物を入れてあげるから！」

「ふふっ…わかりました……ありがとう♥」

お母さんは僕に言われた通りソファァーに腰を下ろした。まずはちよつとゆっくりしてほしい。毎日お仕事を頑張ってくれているお母さんの疲れを、癒してあげたかった。

大好きなお母さんのために、僕は少しでも役に立ちたかった…。

※※※

マンションで二人暮らしをしている僕とお

母さん。僕はまだ一人で料理は出来ないけれど、夕飯の準備をお母さんだけにお任せするわけにはいかない。だから僕は毎日お母さんの料理を手伝い、二人で仲良く食べた。そしてその後は二人でお風呂だ。

この歳でまだお母さんと一緒にお風呂に入っているなんて、おかしいと言われてしまうかもしれないけれど、僕は全然そうは思わない。むしろ、絶対毎日お母さんとお風呂に入りたかった。

少し狭いけど、僕とお母さんは二人並んでそれぞれ自分の体を洗う。おちんちんを洗いながら、僕はふと、隣のお母さんのおっぱいに目を奪われてしまう。大きくって白くって、とっっても柔らかそうなお母さんの二つのおっぱい……。それを見ていると、すごくドキドキして、おちんちんがむずむずしてくる。そういうことを考

えてはいけないのはわかっている。でもどうしても見てしまう…。

そんな僕の視線を知ってか知らずか、お母さんは言ってくる。

「…あつくん…おちんちんは、ちゃんと皮を剥いて洗わなきゃダメよ？皮の中にいっぱい細菌が溜まつちゃうんだから。…もし自分で上手に洗えないなら、お母さんが洗ってあげよっか、あつくんのおちんちん？」

「い、いいよ、そんなの！自分で洗えるよ！」  
僕は恥ずかしくなって目を伏せた。そして急いで体を洗い終え、湯船に浸かった。しばらくするとお母さんも湯船に入ってくる。背中を預けて、僕はお母さんの膝に座るような形になる。お母さんは後ろから僕の小さい体を優しく抱きしめてくれる。背中におっぱいが当たる…。二人で湯船に浸かる時、お母さんはいつもこう

してくれて、僕はこの上なく幸せな気分に含まれるのだった。

だけど今日はいつもととは違い、お母さんは変なことを言ってきた。僕の耳に口を寄せて。囁くような声で…。

「…ねえ、あつくん…さつき…お母さんのおっぱい…じつと見てたでしょ?」

「え…そ…それは…」

僕は気まづくなつて口ごもつてしまう。

「…お母さんのおっぱい…好きなの?」

「……………」

「…ふふふ…いいのよ、いっぱい見ても♥」

促され、僕はお母さんと正面から向き合う姿勢に変わる。お母さんは両手で下から二つの丸い膨らみをもちあげ、僕に向けて強調するようにしてみせた。

「…ゴクッ」

すぐ目の前で小さく揺れる、お母さんの大きなおっぱい…。とても四十歳とは思えない鮮やかなピンク色の乳輪と乳首も、すごく綺麗だった。その先端は、いつもより硬く、尖っているように感じた…。

おちんちんが、熱くなってくる…。

「……………」

頭がボーッととしてきていた。僕は、のぼせているのだろうか…。

「…顔、埋めてみる？…いいのよ…いつもお母さんを大切にしてくれる優しいあつくんに…お母さんからプレゼント♥」

僕は無言で小さく頷き、導かれるままお母さんのおっぱいに吸い込まれた。両の頬が、極上の柔らかさに包まれる。お母さんは両手でギュッと僕の頭を抱え、その上で後頭部を優しく撫でるようにしてくれた。

静かな時間が流れた。僕は一種の恍惚状態に落ちていた。ずつとこのままではいたかった。だけど流れるように、お母さんが言った。

「…学校で…なにかあった？」

「…え」

「…泣いてたんでしょ？…お母さんが帰ってきた時…目…赤かったから…最近そんなこと、多くない？」

「……………」

僕は驚いていた。お母さんには、全てお見通しだったのだ。

「…言っただけなん？…お母さんは…絶対にあつくんの味方だから…」

「……………」

ダムが決壊したみたいに、哀しさと悔しさが溢れてきた。放課後の屈辱がまざまざと蘇る。お母さんと一緒にいれば全てを忘れられるな



んて嘘だった。本当は頭の中に悪夢がずっとこびりつき、ふとした瞬間に僕の心をじくじく蝕んでいたのだ。

お母さんはきつと、そんなことさえ見抜いていた…。

「うう…お母さん…お母さん！」

僕はお母さんにギュッと抱きつき、大声をあげてわんわん泣いた。

「うん…うんうん…大丈夫よ…あつくん…お母さんがついてるからね…」

お母さんは、僕の全てを包んでくれた…。

※※※

「…いらっしやい。勇くん」

「…ちいーす」

僕のマンションのリビング…。座卓を挟んでお母さんと向かい合い、目を伏せて不愛想に挨拶する勇…。意外すぎる急展開に、彼の隣に座る僕は一人戸惑っていた。

僕はお母さんに、いじめの事実を話した。いじめられていることを明かすのは恥ずかしく情けなかったけど、腹をくくって助けを求めることにした。

するとお母さんは、なんと勇を家に連れてくるように言ったのだった。そうして自分が直接彼に話をする。学校や勇の親を介さずにそんな手段を取るのは、僕と勇の今後を考えてのことだという。極力大事にはせず、穏便に解決してしまっただ方が、お互いのためにもきつといいのだと。

正直そんなの上手くいくわけないと思って

いた僕だったけれど、翌日勇気をだして勇にその旨伝えると、彼は意外なほどあっさりと承諾した。お母さんの名前をだされて、さすがの勇も少し怯んだようだった。そして日曜日、別人のように大人しくなって言われるがまま僕についてきた…。

「ああ、そんなに緊張しなくていいのよ、勇くん。…おばさん、なにもお説教しようってわけじゃないから。ただ…あつくんとのことについて…勇くんの正直な気持ちを話してほしいの…」

「…：はい」

「…うん…：じゃあ、あつくん。お母さん、勇くんとお話するから、あつくんはお部屋に戻って待っていてくれる？」

「…：わかった」

僕は立ちあがった。リビングをでる時、もう

一度お母さんの方を見た。目が合う。お母さんは微笑みながら、ウインクをしてみせた。

とても可愛らしいウインクだったけれど、すぐく頼もしかった。これであの地獄のいじめも終わる。心からそう信じられた…。

※※※

勇からのいじめは、本当にパタリとなくなった。彼の仲間のいじめっ子グループも、ちよつかいをだしてこなくなった。あまりに呆気なくて、まるで夢でも見ているみたいだった。

ただ、勇はあの一回の対話で納得したわけでは決していないようで、お母さんはその後も外で勇と何度か会い、彼を説得しているらしかった。

彼にも彼なりの言い分があるらしい。そんな歪んで凝り固まった心を解きほぐすべく、お母さんは時間を割いて話を聞いてあげているのだという。

『…勇くんのこれからのことも…考えてあげないといけないから…』

お母さんはそう言っていた。自分の息子だけでなく、いじめっ子の将来にまで配慮出来るなんて、お母さんは、本当に優しい人なんだと思った。

そんなある日の放課後。僕は勇に不可解なことを言われた。

「…篤志…今から…お前ん家行くぞ。…おばさんが待ってるはずだから。…そこで俺とおばさんがこれまで話してきたことの結論を、教えてやるよ…ふふふ」

「?????」

僕は彼がなにを言っているのかわからなかった。第一、お母さんは今日もお仕事で、家にはいないはずだ。

ところが、勇と二人で帰ってみると、お母さんは本当に家にいたのだ。朝は確かにお仕事に出かける準備をしていたのに…。

「…お…おかえりなさい…あつくん…い…勇くん…はあ…」

玄関で、迎えてくれるお母さん。でも明らかに、なにか変だった。お母さんはいつもは絶対穿かないような、タイトな黒のミニスカート姿だったのだ。その上パンストもつけず、白い生足を剥きだしにしている。それがやけに艶めかしい…。こんなこと、今まで一度も記憶にない。そんなお母さんの頬は、妙に赤い気がする。

「……………」

そしてなんだろう。玄関を開けた時から、ど

ここからか小さく機械のモーター音のようなものが聞こえている。この音はどこからしているのだろうか…。

聞きたいことは山ほどあったけど、僕が口を開く前に、勇が言った。やけに馴れ馴れしい口調で…。

「…おばさん…篤志に教えてあげてよ…これまでの約二ヶ月…俺と何回も会って話し合いを重ねてきて…一体どういう結論に達したのか…」

お母さんは答える…。

「は…はい…ゴクツ…あつくん…お母さんね…あ…あつくんに…い…いじめの相談受けてから…きよ…今日までの間に…な…何度も勇くんと会って…たくさんたくさん…は…話し合ってきました…はあ…ああ…そ…その…その話し合いの…け…結論はね…」





いじめっ子に

飼育されていたお母さん

037

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

「ああ：ああ：」

僕の口から、醜い呻き声が漏れる…。

「あはははは！それだけじゃ全然わかんない  
って(笑)！篤志、呆然としちゃってんじゃん！

：ほら、もつと詳しく息子に教えてあげなよ！」

「は：はい：んん：ゴクツ：あ：あつくん：

お：お母さんね：はあ：あつくんへのいじめ  
をやめてもらおうように：はあ：い：勇くんを

説得してました：はあ：外で会って：何度も

何度も：はあ：その結果：あ：あつくんのこ

ととかは：ああ：ゴクツ：も：もう関係なく

なって：こ：こういう結論に：た：達してし

まいました：はあ：んん：ゴクツ：あ：あつ

くんへのいじめについて：いっぱい話し合っ

た結果：い：勇くんに言われるがまま：はあ

：お：お股に電動バイブ突っ込んで：んん：

そ…それを…あ…あ…あつくんに見せるっていう  
…そういう結論に…た…達してしまいました  
…はあ」

「ああ…ああ…」

僕の呻きは止まらなかった。玄関の上に立ち、  
股間に凶悪そうな黒いバイブを突き刺し、スカ  
ートをまくりあげてそれを僕に見せるお母さ  
ん…。

そういうことに疎い方の僕でも、バイブとい  
うものの存在くらいは知っていた。エロ本で、  
勇に無理矢理見せられたことがあるからだ。セ  
ックスにおけるおちんちんの代わりになるよ  
うな、いけない大人のおもちや…。

「…はあ…ゴクツ」

勇に促されてお母さんは再度説明したけれ  
ど、無論僕はそれでもまるで意味がわからなか  
った。

わかるはずがない。

理解出来るはずがない。

こんな、突拍子もない現実…。

「……」

「あはは！回りつくどいなあ！いいや！じゃあもう息子にはっきりと自己紹介してよ！息子の目をガン見して！ほらいけ、溜美！」

勇は、当然のようにお母さんを名前で呼んだ…。

お母さんは彼に指図されるがまま、僕の間を見て口を開く。

「は…はい…あ…あつくん…お…お母さんは…お母さんは…ゴクツ…た…高井戸…溜美…四十歳…い…い…勇ご主人様の…め…雌犬でございまあ〜〜す♥♥♥」

「!!!!!!」

信じられない単語に、僕は脳が破裂しそうな

ほどの衝撃を受ける…。

お母さんは何故か頬を一段と赤くして、とても嬉しそうにしていた…。

「……………」

愕然として立ち尽くすしかない僕の前で、勇が動く。僕の隣から、お母さんが立つあがりかまちの方に移動し、その股間に突き刺さった電動バイブを挿んだのだ。

そしてそれでお母さんの女性器の中を乱暴にぐりぐりしながら、彼女に問う。

「あはははは！なんでそんなことになったんだよ！息子へのいじめをやめるように俺を説得してたはずなのに！なんでお前は俺の雌犬になっただよ(笑)！ほら、その経緯を息子にちゃんと説明！」

「はうううん♥は…はいい…ああ…あ…あつくん…お…お母さんね…はあ！あああん♥

さ…最初は…はあ♥ほ…本当に勇くんを説得しようとしてたの！ああっ♥くうん♥あ…あつくんへのいじめをやめてもらって…ああ♥は…反省して、こ…更生してもらおうと思っ…勇くんとお話してたの…ほ…本当にそれだけだったの！ああっ♥きやああん♥」

お母さんは正面に立つ僕の目をじっと見て告白する。勇による股間へのバイブ責めに、快感の甘い声を漏らしながら。お母さんにはその攻撃を防ごうとか、やめさせようとかする素振りが一切なかった。

甘んじてバイブでアソコを蹂躪され、スカートを両手であげたまま、その姿を息子の僕に堂々見せていた…。

「……………」

「ああん♥くう…はあ…でもね…勇くん…全然心開いてくれなくて！はあっ！中々本当の

気持ちを話してくれなくて！ああっ！なあん  
♥だ：だからお母さん：まずは勇くと仲良  
くならうと思ったの！はあっ！あ：あっくん  
へのいじめとは関係ないお話をして、い：一緒  
に遊んだりもして！はあ：そ、それで心を開い  
てもらおうと思ったの！なあ♥はあん♥」

ここでお母さんの言葉を遮り、勇が話を引き  
継ぐ。

「なははは！篤志！そうやって俺とおばさん  
はな、どんどん仲良くなっていったってわけ！  
まっ、それが俺の作戦だったんだけど(笑)！で  
さあ、ある日思い切って、俺おばさんに言って  
みたんだよね！……セックスしない？って」  
「なっ！」

勇は続ける。

「：で、俺にそんなやべえこと言われておばさ  
んはどうしたんだっけ？はい！息子の目を見